

ヤマネの巣箱観察におけるセンサーカメラの効率

○宮川景次（筑波大・生物資源学類），門脇正史（筑波大学・八ヶ岳演習林），杉山昌典（筑波大学・八ヶ岳演習林）

<背景・目的>

ニホンヤマネ *Glirulus japonicus*（以下、ヤマネ）は齧歯目ヤマネ科の小型哺乳類である。一属一種の日本固有種で国の天然記念物に指定されている。

ヤマネは主に樹上生活をする夜行性の哺乳類である。日中は樹洞などで休息している。このためヤマネの行動を目視で観察することは非常に困難である。そこで人工の巣箱を利用してヤマネを捕獲し、その後の追跡調査などを行ってきた。しかし、巣箱の中に巣材等の痕跡のみがある巣箱をヤマネがどのように利用したのかという研究はあまりなされていない。ヤマネがどのような時期、時間帯に巣箱を利用しているかというデータは生態的知見を得ることや捕獲効率の向上、など今後のヤマネの保全計画を立てる上で重要な情報となる。

本研究ではセンサーカメラをヤマネの巣箱の前に設置し、ヤマネの巣箱とその架設木の利用状況を撮影した。そこからヤマネの巣箱とその架設木の利用頻度と利用日数、時期、時間帯を観察し、保全のための基礎情報を得ることを目的とする。

<方法>

調査は筑波大学農林技術センター川上演習林で行った。標高 1360～1790m、年間平均気温 6.9℃、面積は約 190ha の山林地である。面積の 70%はカラマツの人工林でミズナラ、カンバ類、カエデ類を主とする天然林から構成される。巣箱は 2009 年から林道や沢沿い等の樹木に 448 個設置されている。

センサーカメラは赤外線式 HyperfireHC600 (Reconyx) とストロボ式 FieldNoteDUO (麻里府商事) を使用し、玉木 (未発表) と落合 (未発表) の調査データから (1) ヤマネが利用したことがある巣箱 6つと (2) 巣材のみ観察された巣箱 4つと (3) ヤマネが観察されたことがない巣箱で付近の巣箱の利用がないものと、(4) 付近の巣箱にはいたことがあるがその巣箱の利用はなかったものを 4 つずつ合計 18 個選んだ。(1)～(4) のカテゴリーの巣箱に対して、2 タイプのカメラをそれぞれ 3、2、2、2 個ずつ配置した。設置期間は 2012 年 7 月から 2012 年 10 月で、カメラは巣箱から 40～100 cm 離して杭や樹木に設置した。

<経過>

赤外線式カメラの設置日数 (実際にカメラが稼働していた日数) は、89～118 カメラ日だった。ヤマネは合計で 863 枚撮影された。同時刻に撮影されたものを 1 枚とした撮影枚数は 297 枚だった。設置した巣箱間で撮影された枚数には大きな開きが出た (0～121 枚)。各月間でも差があった (49～107 枚)。ストロボ式カメラではヤマネが合計で 230 枚撮影された。同時刻に撮影されたものを 1 枚とした撮影枚数は 122 枚だった。現在さらにデータを解析中である。